

名古屋市立大学よりオンライン配信にて「慢性疼痛患者の生きる力を支える人材育成」特別講演会を開催いたしました

- ・主 催：名古屋市立大学大学院医学研究科
- ・後 援：名古屋市
- ・企 画：名古屋市立大学大学院医学研究科 慢性疼痛人材育成運営委員会
- ・共 催：文部科学省 課題解決型高度医療人材育成プログラム
厚生労働省 令和2年度慢性疼痛診療システム普及・人材養成モデル事業
- ・日 時：令和3年2月11日（木・祝）13時30分～16時30分
- ・方 法：名古屋市立大学 医学研究棟 11階 講義室 A より ZOOM によるオンライン配信
- ・参加人数：161名

・内 容

【司会】

名古屋市立大学 麻酔科学・集中治療医学 教授

祖父江和哉

【挨拶】

名古屋市立大学 学長

郡 健二郎

【挨拶】 事前録画

文部科学省 高等教育局医学教育課 課長

丸山 浩 氏

【講演】 第1部「痛みの診療最前線」

「慢性疼痛患者の生きる力を支える人材育成」プログラムの紹介

名古屋市立大学 精神・認知・行動医学 教授

明智龍男

「精神科医と臨床心理士の役割」

名古屋市立大学病院 いたみセンター副センター長／名古屋市立大学 精神・認知・行動医学 助教

近藤真前

「アクセプタンス&コミットメント・セラピー（ACT）の実践」

名古屋市立大学病院 いたみセンター／名古屋市立大学 精神・認知・行動医学 臨床心理士

酒井美枝

「地域医療連携といたみセンターの役割」

名古屋市立大学病院 いたみセンター長／名古屋市立大学 麻酔科学・集中治療医学 教授

杉浦健之

「ニューロモジュレーション治療の可能性」

名古屋市立大学 リハビリテーション分野 教授

植木美乃

【講演】 第2部 特別講演 「慢性疼痛の課題克服に向けて」

愛知医科大学 学際的痛みセンター 教授

牛田享宏 氏

【挨拶】

名古屋市立大学保健医療福祉連携理事／名古屋市の健康福祉局 保健所長

浅井清文

令和3年2月11日（木）、名古屋市立大学にて、名古屋市立大学医学研究科主催「慢性疼痛患者の生きる力を支える人材育成」特別講演会を開催しました。今回は、WEBを使ったオンライン講演会形式を採用しております。講演会には慢性痛の治療に関心のある医療関係者を中心に、北は北海道から南は沖縄まで全国から148名にご参加いただき、現地参加者13名を加えて161名もの多くの方々にご参加いただくことができました。メディアからは中日新聞社様に取材にお越しいただきました。

本イベントは、平成28年度に文部科学省「課題解決型高度医療人材育成プログラム」に採択していたから、令和2年度までの5年間の事業総括として、これまでの取り組みや成果を発表し、より良い慢性疼痛治療を一人でも多くの患者さんに届けるために開催いたしました。

最初に郡学長から、横断的に取り扱う痛みの取り組みの重要性と、プログラムに応募した当初のエピソードも交え、医薬看心理が関わる文部科学省のプログラムを申請した経緯をお話していただきました。さらに、痛みの学問を学生初期から教えていくことを評価していただき、また、臨床実習現場のいたみセンターを、大学・病院としてサポートしていくと励ましのお言葉をいただきました。

続いて、文部科学省高等教育局医学教育課課長、丸山浩氏から、事前録画にてご挨拶を賜り、我々が行ってきたプログラムのうち、臨床心理士を含めた人材育成や、多職種カンファレンスに学生の学びの場を与える点に高い評価をいただきました。これらの実績をさらに発展させ、他の大学医療機関へ広げるように、ご指導をいただきました。



開会挨拶の様子（右：郡学長 左(司会)：祖父江先生）

痛みの診療最前線

講演の第一部として、名古屋市立大学のスタッフから、プログラムの紹介（明智）、精神科医と臨床心理士の役割（近藤）、ACTの実践（酒井）、地域医療連携といたみセンターの役割（杉浦）、ニューロモジュレーション治療の可能性（植木）のタイトルで、講演を行いました。

明智先生は、人材育成事業の背景として、慢性痛はCBTを含めた多職種アプローチ、行動科学モデルでの理解が重要であり、その領域のスタッフが少ない問題を強調されました。そのため学生のうちから理解を深める教育プログラムとなっている、特徴のある人材育成事業の本プログラム内容を詳細に説明していただきました。

近藤先生は、医学と行動医学の世界観の両立が重要であることを強調されて説明されました。うつ、PTSD、ADHDには慢性痛との関連がありそうだというお話していただきました。さらに、慢性痛治療における心理教育の重要性、行動面への動機付けを、脳解剖を示しながら説明していただきました。

酒井先生は、新世代の認知行動療法であるACT（アクト）の詳しい説明と、実践内容につき例をあげながら丁寧に説明してくださいました。最後に、エキスパート養成コース第1期生の立場から、複雑な慢性痛の病態理解、多職種協働を習得し、指導を受けながらACT実践し、介入マニュアル作成により学びをアウトプットできたことなどの成果についてお話がありました。

杉浦先生は、いたみセンター設立の経過と、慢性疼痛診療に関わる厚生労働省のモデル事業と文部科学省の人材育成事業を両輪として、いたみセンターにおける臨床・教育の地盤が作られ進められてきた経緯を説明されました。また、いたみセンターの院内多診療科連携と地域連携の重要性と、それぞれの役割分担について説明し、協力の要請をさせていただきました。

植木先生からは、経頭蓋磁気刺激・電気刺激のようなニューロモジュレーション治療を、視床痛（左上下肢の痺れ、灼熱痛）の患者への適応を例示され、紹介していただきました。



質疑応答の様子（講演第1部 進行：明智先生）

特別講演

「慢性疼痛の課題克服に向けて」



講演の様子（牛田先生）

慢性痛の実態：痛みには感覚的な成分と情動の成分がある中、慢性痛の場合は情動による痛みが大きな役割を果たしていることを、好きな人に叩かれた場合と、交通事故で受傷した場合とを例に挙げ、説明されました。また、平均寿命の延び、高齢者の増加、治療困難な神経障害に関わり、満足した治療が得られていない患者が多い現状をお話しされました。そしてドクターショッピングにつながる理由として、医療への満足度が低いことを指摘されました。慢性痛＝精神＋器質の問題であり、システム・チームで診ることを推奨されました。

さらに、集学的治療でも悪くなった方、ドロップアウトした方を今後どうするか課題が存在することもご教授いただきました。また、痛みセンターの役割として、高確率で見逃しがある、レッドフラッグや神経病態の再評価の重要性、多職種役割分担で患者背景を評価する重要性を、CRPSの症例を提示して説明していただきました。愛知医科大学で行なっている治療介入としては、レッドフラッグのない（がん・神経障害のない）患者を対象とした、ペインマネジメントプログラムをご紹介いただきました。本格的に取り組むためには、専任スタッフを整えることの必要性を強調されていました。

教育では、愛知医科大学の疼痛部門は2007年に独立した部門として学生講義（生理学・薬理学・麻酔科）を、2010年から基礎医学セミナー（3年）、2013年からポリクリ1週間などを行い、2017年からは疼痛医療学（13コマ）の試験を開始していること、さらに最近作成された疼痛医学の教科書を紹介していただきました。

最後に、浅井先生からご挨拶をいただきました。文部科学省の5年間の人材育成プログラムでは、分野横断的に進められてきたことが素晴らしいとお褒めいただき、学生教育の必要性から、今後とも継続性が重要であるご指摘いただきました。トップランナーである愛知医科大学学際的痛みセンターを追って、名古屋地区が痛み診療の先進地区としてますます発展してほしいと激励の言葉をいただき、終了となりました。

ご参加いただきました皆様には、97%の方が内容に満足したとお答えいただき、「これからの痛みの集学的治療の方向性について、多くのことを学ぶことができた。」「ACTについてもっと理解を深めたいと思った。」などの感想をいただきました。また、「Web配信のおかげで聴講できた。今後も成果や更なる課題提起などオンライン講演会を企画してほしい。」など、貴重なご意見も数多く頂戴しましたので、今後の活動の参考にさせていただきます。たくさんのご参加ありがとうございました。



講演の様子（第1部：左から明智先生、近藤先生、酒井先生、杉浦先生、植木先生）